

巻 頭 言

リサーチマインドをもった精神科医の臨床研修を

武田雅俊 日本精神神経学会理事

Masatoshi Takeda

精神医学領域では、脳科学・神経科学の成果が臨床にフィードバックされ、新しい知見の臨床応用が可能な状況になりつつある。一例として、脳機能画像領域を見てみよう。MRIは、統合失調症における上部側頭回の体積減少、うつ病における海馬の体積減少、PTSDにおける扁桃体の体積減少などの知見を明らかにした。fMRIは、統合失調症患者では前頭葉課題時の前頭前野における賦活の低下を示した。PET用のリガンドが開発され、精神疾患におけるドパミン、セロトニンなどの受容体の変化と薬物の効果が示されている。アルツハイマー病脳に沈着する β アミロイドのリガンド(PIB)が開発され、PETによる β アミロイドの可視化が可能となった。近赤外分光鏡(NIRS)は、脳活動に対応した部位での酸化ヘモグロビン[oxy-Hb]と還元ヘモグロビン[deoxy-Hb]濃度の変化を測定するが、うつ病患者では前頭葉課題時に前頭前野の[oxy-Hb]増加が低下している。

分子遺伝学領域の知見も臨床に 응용され始めている。ヒトゲノムプロジェクトにより約3万個のヒト遺伝子の配列が解読され、遺伝子と疾患との対応が明らかにされ始めている。精神疾患の多くは多数の遺伝子と環境の相互作用により発症すると考えられ、疾患のリスク遺伝子が次々と同定されつつある。たとえば、アポリポ蛋白Eの一般人口での頻度は、3型(85%)、4型(10%)、2型(5%)であるが、アルツハイマー病では4型の頻度が異常に高い(35%)ことが知られており、アポリポ蛋白E4を有する人はアルツハイマー病の発症リスクが高いこと、発症年齢が低いことが知られている。ファルマコゲノミクスは薬剤反応性と遺伝子型との対応を調べることで個人に最適な薬物療法を提供しようとするものであるが、多くの向精神薬についての代謝酵素(CYP2D6など)遺伝子型のタイピングが応用され始めている。

本年1月7日号のNatureは“A decade for psychiatric disorders”と題したエディトリアルを掲載し、これからの10年は「精神疾患の研究」の時代となることを明言している(Nature, 463, 9, 2010)。

上に述べたように精神医学領域における医療情報は大きく展開しており、これから精神医学は大きく飛躍する時を迎える。新しい医療情報と医療技術が臨床の場に適切にフィードバックされるためには多大な臨床研究が必要とされる。今の大学精神科にはこの臨床研究の底上げが期待されているのであるが、現状でははなはだ心もとない。

以前の医療界にはある程度の余裕があった。大学でも多数の若人が勉学のために集い、大学の教室員は日中の臨床業務をこなした後、夕方からは研究のための時間と余裕が与えられていたが、昨今の医療事情は必ずしも研究のために費やす時間と余裕を保証してくれない。医療サービス向上と収益改善が要求されるようになり、患者数、入院数、稼働率、回転率などの収益面での評価が優先されるようになり、予算配分も人員配置も収益によってコントロールされ、ある意味での成果主義は、大学の教室から余裕を奪っているようにも見える。大学精神科における臨床研究の必要性和重要性を再認識したいものである。また、若い人も資格と給料とで勤務先を選択し、真の意味での精神科臨床研究の醍醐味を忘れかけているのではないか。若い時期にリサーチに打ち込むことの意義と楽しさを忘れてほしくない。

精神科臨床の基本は、精神疾患患者の治療にあり、若い精神科医にとって最も重要なことは、患者の治療に役立つ知識と技量を身につけることにあるのは言うまでもない。治療に役だちうる情報と技術とが、すぐそこまで来ている今の時代には、多くの若い人が臨床研究に情熱を燃やして、この課題にチャレンジしてほしいものである。